

【インタビュー】

野田泉氏（本科 15 期卒）の体験談を振り返って

吉田 篤志・谷本 宗生

1 はじめに

野田泉氏は、1918（大正7）年11月生まれで、現在静岡県熱海市在住の大東文化学院第三部東亜政経科1期（本科15期）生の方である。2018年11月で、めでたく百歳をお迎えになった。野田氏より、このたびご自身の所蔵文献資料などを本学に寄贈したいとの申し出があり、2018年7月17日、吉田篤志歴史資料館運営委員（文学部中国文学科准教授）、谷本宗生歴史資料館運営委員（歴史資料館・東洋研究所特任准教授）、関屋幸太職員（総務部総務課）が熱海のご自宅にて、野田氏の貴重な体験談（東亜政経科の大東文化学院時代、「満州国」の官吏養成機関である大同学院を経てから1944（昭和19）年の教育召集入隊、翌45年7月経理部教育隊（牡丹江市内）への転属、敗戦時の横道河子でソ連軍に抑留、傷病兵として1947年6月に帰国、など）をうかがい、関係する文献資料の幾つかを大東文化歴史資料館にご寄贈いただいた次第である¹。

以下、野田泉氏からうかがった体験談を、①大東文化学院生のころ、②大同学院に進学、満州での入隊生活、③シベリア抑留を経て、帰国、



資料1 インタビューに応える
野田泉氏
(撮影：関屋職員)

④大東文化学院同期生との交流（絆）、といった4点にまとめて要約掲載する。それに続いて、吉田委員による野田氏体験談をうかがったの感想、谷本委員による野田氏体験談の補足解説を付す。

2 野田泉氏の体験談（要約）

① 大東文化学院生のころ

「大東文化学院に入ったのは、1938（昭和13）年の4月。ちょうど本科が三部制に移行した時で、第三部東亜政経科の1期生です。本当は士官学校に行きたかったのですが、目が悪くて（視力が弱くて）ダメでした。同期は40人ほど。1941（昭和16）年の3月に卒業です。先生方は、東京帝国大学を停年され名誉教授になられた吉田熊次先生。教育学の権威です。終戦後に一橋大学の学長になられた東京商科大学の中山伊知郎先生（経済学）。当時は40代で若い先生でした。東京外国語学校の外国人講師で中国語を教えてくれた有名な包翰華先生もいました。漢学の大家・岩村成允先生は、1940（昭和15）年、満州国皇帝・溥儀が2度目の訪日の際に、恐れ多くも昭和天皇との通訳を務めたという話をしてくれたのを覚えています。

吉田先生の授業だったかな、同級生が『先生の言うことは間違っている』と、授業中に指摘し始めたのです。教育学の大家に対してですよ。初めのうちは先生も相手にしなかったのですが、だんだん熱くなって遂には先生も怒り出してしまいました。当時はそんな熱い学院生がたくさんいました。

卒業後は、多くが中国大陆へ向かいました。岩村先生の息子（岩村成正）さんは、高等科を出て北京の『北支開発企業（華北交通株式会社）』に入社。僕の2～3年先輩で、優秀なやさしい人でした。国策会社だった『満拓公社（満州拓殖公社）』にも多くの先輩方が入っています。」



資料2 提供された文献資料を確認する吉田（手前）・谷本（奥）の両委員

② 大同学院に進学、満州での入隊生活

「卒業後は、満州の中間官吏養成機関だった大同学院へ進学。徴兵検査も受けました。目が悪くて、第二乙でした。第一甲、乙までが即戦力ですので、卒業後は通河県という小さな国境県の公署（総務係）に見習いで勤めました。長野県、山形県、岩手県の開拓団が将来日本人の理想郷を作る目的で入植していた地域です。もちろん国境地帯ですから、満蒙開拓青少年義勇軍の幹部訓練所も点々とありました。戦略的目的（対ソ連）も多分にあったと思います。

1944（昭和19）年6月に、教育召集で浜綏線下城子の第一、二一五部隊に入隊。通常は3カ月で戻れるのですが、3カ月経ったら普通召集になっちゃった。もう兵隊が不足していて、どんどん召集ですよ。最初は二等兵。すぐに一等兵になりましたが、もともと目が悪いので上等兵にはなれなかった。召集された部隊は、ソ連との国境線50kmぐらいの山中にある重砲兵部隊。目の前にはソ連の部隊がいました。そこで約1年過ごして転属。牡丹江省にあった関東軍経理部に教育隊ができて、そこに移りました。でも2カ月後には終戦。終戦の前にソ連軍が入ってきましたしね。終戦の2～3日ぐらい前に、横道河子まで撤退しろという指示が



資料3 手振りを交え熱く語る
野田氏

あり、武装して撤退したのですが、結局、戦わなかった。」

③ シベリア抑留を経て、帰国

「終戦が1945（昭和20）年の8月15日。9月には、シベリアに連れて行かれました。未墾のすごい森林地帯です。満州中から集められたいろいろな日本軍の部隊が、班ごとに粗末な小屋みたいな家を作って、主に伐採作業をやりながら自給自足です。作業中に誤って足を骨折して、2カ月ぐらい寝たきりでした。ある時大きなトラックが来て、負傷者全員が荷台に載せられたんです。『これは、どこか山奥に行っておき去りにされるのかな』と思って焦りました。そしたら満州に戻り、途中で列車に乗り換え、なんと牡丹江まで運ばれました。牡丹江には、旧関東軍の陸軍病院が2つあり、そのうちの1つに入院です。日本人の軍医、看護婦もいたのですが、もちろん監視下で、ベッドも何もない広い病室に病人10～15人雑魚寝でした。その後歩けるようになってから、またシベリアに戻って今度は軽作業をやらされました。

1947（昭和22）年6月に、運よく傷病兵として帰国できました。シベリアでの抑留は1年半ぐらいでした。帰国後、郷里の熱海に戻り（実家は旅館業）、11月に熱海市役所に入りました。定年ま

で28年勤務して、定年後は社会福祉協議会の事務局長を5～6年務めました。熱海は空襲に遭ってなくて、戦時中は旅館がすべて日本軍の傷兵、病兵の療養所になっていたようです。戦後は、疎開兼避難先として、東京からもたくさんの人たちが移り住みました。」



資料4 野田氏に質問する吉田
(手前)・谷本(奥)の
両委員

④ 大東文化学院同期生との交流(絆)

「同窓会(一政会)は年に1回、日本全国の名所、旧跡、温泉のあるところで、やっていました。だいたい参加者は同期10名ぐらい。その時は、なぜか戦争の体験談は話題になりませんでしたね。

主な大東文化学院同期生を紹介します。まずは、今回インタビューにわざわざ来られた吉田先生のお父さん、“ゲンちゃん”こと吉田源七。満蒙開拓青少年義勇軍の教育係をしてから、南方戦線のニューギニアに行きました。戦後は、長岡市教育委員会で教育長を務めました。1988(昭和63)年の一政会で、山の上にできた大東文化大学東松山校舎を一緒に見に行ったのが懐かしい思い出です。

近藤光五郎は、大同学院でも一緒でした。愛媛県出身の彼は真面目で成績優秀で、徴兵検査も甲種合格。千葉県松戸の陸軍工兵

学校を卒業後、中尉か大尉でサイパンへ。その後、満州を経て、終戦直前は釜山に。戦後は新居浜東高校の教員をしばらくしていました。同窓会に自分の畑で栽培していた真っ白い果肉のカキを持ってきてくれて、皆で食べました。

大東文化学院に在籍していたころは、足立という名前でしたが、戦後、別府の大分ガスの社長を務めた福島（足立）親比古は、養子に行って福島の姓に変わりました。在学当時は3年間、皆中国語を一生懸命やるわけですが、なぜか足立だけインドネシア語を猛勉強していた。戦争が始まると、彼は南方のインドネシアに行き、終戦まで南方開発をしていました。

高知県出身の井上長英は、坂本龍馬みたいな男でした。戦後は、高知県吾川郡いの町の教育長、町長を務めました。鹿児島県出身の村山隼人は、中国で八路軍（中国共産党軍）と戦い、終戦後8～9年経ってようやく戻ってきました。北海道出身の宮腰勉と吉積民郎。2人とも体が大きくて、吉積は札幌市の区長を務めていたそうです。

1999（平成11）年11月に、九段会館で一政会の解散式を行いました。もう皆高齢になってしまっただけで。会の後に上野公園に行って、西郷さんの前で写真を撮りました。今はもう、私以外はすべての同期生が亡くなっていると思います。」

3 野田泉氏の体験談をお聞きして（感想）

野田泉氏は大東文化学院第三部東亜政経科の1期生で私の父（吉田源七）と同期であり、そのご縁で、息子の私（吉田篤志）にお声がかかったわけです。そこでインタビューのまとめ等は谷本運営委員にお任せし、私は野田氏の体験談を基に、父の若かりし頃の様子を交えながら感想を述べてみます。

1923（大正12）年の関東大震災の当時、父は祖父の仕事の関係で銀

座（歌舞伎座の裏手）に住んでおり、ちょうど4歳の時です。地震の揺れがおさまり外に出てみると、屋根瓦が道路の真ん中に滑り落ちて積もっていたそうです。その後、避難場所（日比谷公園）で数日過ごしてから山の手の方へ避難し、渋谷に居を構えたというわけです。この時の恐怖の体験は子供心に刻み付けられたようです。奇しくも大東文化学院創設の年に当たります。その後父は、青南尋常小学校（港区立青南小学校）を経て府立第六中学校（都立新宿高等学校）を卒業し、大学を目指しておりましたが、8人兄弟で進学する経済的余裕がなかったところ、給費制度があり、東亜政経科が開設（1938年）される大東文化学院が目にとまったのであります。野田氏が給費制度を目当てにしたのかどうか、お聞きしませんでした。父は入学当初、給費制度を目当てに入学した学生がかなりいた話をしていたことを記憶しています。この制度は相当に入学者の経済的負担を軽減したものであると思われまふ。東亜政経科は卒業後に大陸へ渡る者が多いということで、血氣盛んであった父にふさわしい学科であったかもしれません。九段校舎は1941（昭和16）年に池袋校舎に移転していますから、1941（昭和16）年の3月に卒業した父は、九段校舎で受講した最後の学生であったのです。

東亜政経科に入学した学生の希望や期待とは裏腹に、富国強兵策を推進してきた日本にとって、海外への植民地政策は不況と相まって増進の一途をたどり、またシベリア出兵（1918～1922年）を契機とした共産主義の拡大阻止を名目として、1925（大正14）年頃から思想統制（治安維持・共産主義対策）のために大学や専門学校には軍事教練と称して軍人が配属され、大東文化学院も例外ではなかったわけです。また震災後の不況続きで、そのあおりを受けた若者たちは、「満蒙開拓義勇軍」と称して旧満州（遼寧省・吉林省・黒竜江省の東北三省）の開拓村（開拓団）へ移住し、荒れ地を開墾して生活する道を選ばざるをえませんでした。東亜政経科の卒業生は、卒業後すぐに開拓地に入り、歳の差があまりない青年らの教育に当たったわけです。当時の満州は「満州国」（1932

〔大同元／昭和7〕年から1945〔康德12／昭和20〕年であります。野田氏の体験談に基づく、日本人100万人の移住（入植）計画を立案した石原莞爾（1889～1949年）の政策に基づき、「理想郷をつくろう」というスローガンの下、仕事のない若者たちは次々に満州へ送られました。当時、現地には「満拓公社」を組織し、その人員の中には清朝の政治制度に詳しい国語漢文科の学生もいたそうです。しかし、表面的には「大東亜共栄圏」や「新天地」と言った美名によって行われた国策であったわけです。

野田氏は、大東文化学院卒業後に満州国官吏養成の大同学院に進学し、徴兵検査を受けます。大同卒業後、国境の通河県の公署に勤務します。1944（昭和19）年6月に教育召集され、そのまま普通召集となり、ソ満国境（黒竜江省）の地域部隊に配属され、終戦時にはソ連軍の捕虜としてシベリアに抑留、その後森林伐採の時に足に大怪我をし、牡丹江にある関東軍の陸軍病院（監視下にある）で傷を癒し、再度シベリアに送られ、その後、1947（昭和22）年6月に帰国し、熱海市役所に勤務したと語っています。私の父も、1941（昭和16）年3月末、大東文化学院卒業後すぐに牡丹江（黒竜江省）の東、ソ満国境にほど近い綏陽（現在の東寧県綏陽鎮）の「老菜營」訓練所に赴任し、開墾を手伝う傍ら、カラマツの植林やキノコ栽培もやったそうです。雨の日には吉川英治の『宮本武蔵』を読んで聞かせたとも言っておりました。そんな生活は10ヵ月ほどで徴兵を受け通信兵として戦地へ赴き、八路軍（中国共産党軍）との戦闘で負傷して帰国、快復後は南方戦線に送られ、ニューギニアで終戦。復員時にはマラリヤに罹った痕が体中に黒い斑点として残っていたそうであり、祖父の郷里の新潟で静養し、そこで教員生活を再開したのです。

1938（昭和13）年に創設された東亜政経科は、1937（昭和12）年の盧溝橋事件に端を発した日中戦争・大東亜戦争（第二次世界大戦）への軌跡と重なるものがあります。それは、当時の政治状況や経済状況から

して、必然的であったのかもしれませんが。それでも、そこに青春をささげた当時の学生の思いは消えることはありません。東亜政経科1期生(昭和16年卒)の方々が卒業後に満州へ渡ったことは父から聞いていましたが、現地でどのような仕事をし、またどのような生活を送っていたかについては、具体的にお聞きしたのは野田氏が初めてです。ソ満国境や哈爾濱・牡丹江でのこと、またシベリア抑留や負傷による闘病生活、その後の日本への引き上げ等々、波乱なご体験は、我々の世代の者には頭では理解できても真に理解することは難しいのかもしれませんが。それでも先達の体験を次世代の者は知っておく必要があるものと確信しております。野田氏の体験談を思いながら、亡き父から聞いた話を、記憶をたどりながら述べさせていただきます。

(吉田篤志：歴史資料館運営委員)



資料5 提供された関係資料の一部

4 野田氏体験談の補足解説

① 第三部東亜政経科の設置

1938(昭和13)年、在学生や大東文化協会関係者らの声や国策上の要請を受け入れるかたちで、大東文化学院の本科を「三部制」へ組織変更する。第一部 修身漢文科、第二部 国語漢文科、第三部 東亜政経科、からなる私立専門学校に転換したのである。入学定員も各科50名であったが、三部制の初年(1938年)度に

3～5倍の応募者が殺到したため、とくに人気の高かった東亜政経科は次年（1939年）度には、定員80名と増員する。修身漢文科の卒業生には漢文科中等教員の資格を、国語漢文科の卒業生には国語科中等教員の資格を、そして東亜政経科の卒業生には、中国語科教員及び計理士の資格を得ることができるよう学科改正も行っていく。とくに第三部の東亜政経科は、「満支両邦ニ活動シテ国策ニ寄与スル国家的人材ノ養成」、「満支両国ニ於テ縦横ノ活動ヲナシ得ル人士ヲ養成」することを目指すとしたのである。かつては「漢学の大東」と称された大東文化学院の卒業生は、その語学力や大陸事情などの自校の強みを存分に活かし、日本の内地外地を問わず、教育界を含めた官衙、銀行、商店、会社、新聞社等で活躍していくことになる。

三部制の導入、とくに東亜政経科の設置にいたる事情などについて、『大東文化大学五十年史』（大東文化学園、1973年）と『大東文化大学七十年史』（大東文化学園、1993年）の記述を少し挙

備考	本科 第三部 東亜政経科																							
	科目	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年	第一學年	第二學年	第三學年		
作文ハ課外トシテ之ヲ講ス 英語筆力ノ増進ヲ要スルモノハ課外教授ヲ行フ 臨時講義外講義ヲ行フコトアルベシ	計																							
	武	一																						
	教	二																						
	運	一																						
	近世世界史																							
	東洋政治學																							
	植民地學																							
	國民學																							
	商業數學及球算																							
	會計學																							
	簿記																							
	滿支經濟事情																							
	東洋經濟地理																							
	商業概論																							
	貨物銀行金融																							
	財政學																							
	貿易實務																							
	商工經濟學																							
	商法																							
	民法																							
法學通論																								
論理學心理學																								
英語																								
支那語及支那時文																								
第一學年一週時間		二																						
第二學年一週時間			二																					
第三學年一週時間				二																				
計	三七	三八	三八																					

資料6 第三部東亜政経科の学科課程²

げておきたい。『大東文化大学五十年史』では、「学則改定³」という項目で「満蒙の地に進出を目指す気運」と挙げている。そして、「このような素地はすでに[学院]創立当時より協会内の先覚者達によって培われていたもの」（以下、[]内は引用者による補注）とし、田中逸平、内堀維文、藤沢親雄、鳥飼健、尾崎亘ら関係者の思想や活動を例示している。「国語科設置を望む学生側の希望、創立趣旨と時局の要望、さらに経営上の問題等いくつかの要因が相まって、遂に昭和十三年、第一部修身漢文科、第二部国語漢文科、第三部東亜政経科の三部制設置の学則改定をみるに至った。この三部制の設置は、時代の要望に即した発展的なものであることはいうまでもないが、創立に当たって『皇道ニ醇化セル儒教』の振興を建学の精神とした漢文専門校であった学院が十五年を経てかくの如く変貌していったことは、大東発展史上における特筆事項の一つである」と述べている。一方『大東文化大学七十年史』では、「『東亜政経科』を新設⁴」という項目で、「学院も時局に沿って学制を改めて本科を三部制にした。従来通り漢学を主体とする第一部修身漢文科と第二部国語漢文科に加えて、大陸経営の要員を養成する第三部東亜政経科を設けた」とし、「政経科の性格が大東の伝統とは異質だということで、ほかの部（一部・二部）の学生たちと融け合わないというようなことはなく、同期生間では仲よくやっていたが、上級生、ことに高等科生の中には『余計な者が入ってきた』という雰囲気があった。従来の教授の多くが政経科を白い目で見ていた」と述べている。そして三部制の導入をめぐる、「当時の是非論議の当否はそれとして、大東が文科系総合大学としての歩を進めている今から顧みると、この東亜政経科が今日の大東の一つの土台になっていたことは確かであろう」と結論づけている。

ここで、野田氏らと同じ東亜政経科の1期生で、戦後も同窓交

流をはかった1人である吉田源七が「東亜政経科第一期生の思い出⁵」を同窓会誌で記しているので、以下に紹介しておこう。

「九段校舎に東亜政経科のできたのは昭和十三年四月である。[昭和]十一年には二・二六事件があり、十二年には日中戦争が起り、入学した十三年四月には第一次近衛内閣が国家総動員法を公布した。新入生四十人、名士濟濟ひとくせもふたくせもある者たちであった。学究肌の漢文科や日文科の中に異質の者が入ったので、先輩たちもとまどったと思う。教育学の大家吉田熊次先生を怒らせたり、登山家の草分けの田部重治先生は英語。よく山の話がされた。今は唐詩選の訳で知られている斎藤响先生は西洋哲学。京都学派の藤沢親雄先生は国家学、小島威彦先生は植民史。古書で高価になっている安南史の著者岩村成允先生は支那[ママ]時文。戦後東大講師だった魚返善雄先生はまだ若く、注音字母の千字文を作り、重複したものを発見した人には中華料理をおごると言った。中国語の白[今愚]先生は先輩の先生方と教室に出入する時は扉を先に開け、必ず後から出入し礼儀のいかなるものかを我々に示してくれた。戦後一橋大の学長になられた中山伊知郎先生の経済学には誰もが耳をかたむけた。珠算の四球を考え出した川村貫一[川村貫治]先生。民俗学の大家加茂儀一先生は商業英語。戦後東京裁判の証人として出られた井上孚磨[井上孚磨]先生は帝国憲法。倫理学の授業は加藤梅四郎先生と時々小柳司気太先生が来られた。学生生活も国家体制に影響され、先輩にさそわれ禅の道場へ行く者、右翼活動に参加する者などで割合に固い生活であったが、神楽坂あたりが遊び場で、よく行く喫茶店や居酒屋では蘇州夜曲や別れのブルースなどが唱われていた。しかし十三年には張鼓峰事件、次の年にはノモンハン事件。第二次大戦の勃発などで軍の統制が強まり、歓楽街での学生狩や津田左右吉先生の著書発禁など、続く統制と急激に変化する社会に我々の話題も国



資料7 インタビュー後に歓談する野田氏と吉田・谷本の両委員

の行く末を論ずることが多くなっていた。当時を思うと今は滄桑の変。母校の発展を祈る」

② 大同学院と大東文化学院卒業生

大同学院は、満州国の首都とされた新京特別市に設けられた官吏養成機関である。1938（昭和13）年の応募告知⁶などをみると、学院の学制は第一部（大学専門学校卒業生より選抜採用する一般文官・技術官）と、第二部（満人学生より採用する）である。修業年限は半年（第一部技術官・第二部）と1カ年（第一部一般文官）、募集人員は100名。応募年齢は、在学中の者に年齢の制限はないが、卒業者は満26歳未満とする。受験資格は、1、高等専門学校以上の学校卒業生または入学までに卒業の見込ある者。2、日本の高等試験本試験または予備試験合格者。3、高等専門学校卒業程度以上の学力ある者と国家にて検定された者。4、満州国の指定する機関より推薦された者、などとする。入試科目は、第一次試験（筆記試験）—法制（2時間）、経済（2時間）、語学（2時間）、常識問題（2時間）、第二次試験（口試及体检）である。大同学院では、在学中は学院寄宿舎にて共同生活を行うとしている。規律節制の生活につとめ、朝夕は必ず点呼を実施する。在学中の外出も、定められた日時その他にはとくに許可していない。

共同訓練などでは、号音をもって正確及び俊敏に行動するものとして
している。

大東文化学院から、まず本科5期卒業の高辻長吉が1932（昭和7）年に、大同学院の第1期生で入学している。その翌33年には、高等科7期生の鳥飼健が入学する。鳥飼は卒業後、大同学院の教務主任まで務めている。その後、大東文化学院本科9期齋藤保、難波光男、関口卓司、本科10期の土岐竜雄、小山正二、本科11期齋藤進、植松正三寅などが、次々と大同学院に入学・卒業して、満州国の県参事官などに就任して自らの任務を果たしている。



資料8 高辻長吉壮行会（志道会亜細亜部）⁷ 中央で腕組みしているのが高辻本人

③ 野田氏の満州回顧記

管見の限りではあるが、このたび大東文化歴史資料館へ寄贈いただいた資料のなかでも、野田氏が満州回顧記を記しているもの

がみられた。これもまた、当事者による貴重な回顧録であろう。そのうちの幾つかを、以下のとおり抜粋紹介しておきたい。

「教育召集で、浜綏線下城子山奥の第一、二一五部隊に入隊したのは[昭和]十九年六月、其の後二〇年七月経理部教育隊（牡丹江市内）に転属、終戦当時は磨刀石（穆稜西方）でソ連戦車の侵入に備えておりましたが、後退することとなり、横道河子の陣地に到着したのが八月十六日でした。その数時間後にはソ連戦車が侵入して来ました。戦車の上では勝利を祝う男、女の兵隊が肩を組んで歌を唄っておりました。その後は作業隊に編成され、綏芬河経由で入ソ、沿海州各地で伐採、コルホーズその他[で]の作業をつづけ、二十二年六月幸運にも病兵として帰国、今日に至っております。通河は、現地勤務の最初の地でしたので、短かい大陸生活の中でも一番強い印象を受けております。通河の町で、開拓団で、また部落で出会った多くの人々（現地人を含めて）や、およそ大陸らしからぬ山水と緑の豊かな自然等！！あの人は？あの山は？今如何等と、折にふれ、話すにふれ感傷にひたることが屢々です⁸」

「今回[1985年]は、遠い青春時代の一時期を懸命に過ごした思い出多い[中国]東北の地をつぶさに訪れることができ、感慨又深きものがありました。私の大陸（東北）[ママ]経験は、皆様方のその様な悲痛な激甚なものではなく、学校出たての独身者、しかも終戦一年前の応召、敗戦、シベリヤ送り、個々の状況は千差万別でしたが、いずれを見ても、皆様が、遭遇され、体験さ[れ]た極限状況に比べれば、遥かに幸運なものでした。改めて皆様の当時の御辛酸に対し深甚なる謝意を表する次第であります。…孤児の親探し帰国の報道には、毎回耳をそば立て、テレビを見ては心を痛めていましたが。この悲劇発生の一端を負うべき者のひとりとして、今回ハルピン、方正等で孤児、残留者から直接

お話を伺うことができ、今後は遅ればせながら現地の皆様の幸福のために、少しでもお役に立つよう、この運動に参加することを決意いたしました⁹]

同上に記されてあるように、野田氏は自身の青春時代の満州体験を懐かしむ気持ち以上に、同じ時代や場所をたしかに生きた歴史的な関係者の一人として、自らの心情についても吐露し証言している。たとえば、1945年の敗戦によって、旧満州では数千名以上の残留邦人が発生したとされる。それはまさしく、作家の山崎豊子（1924～2013年）自身が「泣きながら取材し、命を懸けて書いた¹⁰」とされる作品『大地の子』（1987～1991年）などでも描かれた波乱の人間模様や世界観に通じるものといえるだろう。ちなみに、2018年10月末時点での厚生労働省による発表では、中国残留日本人孤児の総数は2,818人と挙がっている。

（谷本宗生：歴史資料館運営委員）



資料9 野田ご夫妻を囲んでの記念撮影

-
- ¹ 『大東文化歴史資料館だより』大東文化歴史資料館、第25号、2018年11月参照。
 - ² 『大東文化大学の歩んできた道』大東文化学園、2013年、37頁。
 - ³ 『大東文化大学五十年史』大東文化学園、1973年、301～308頁。
 - ⁴ 『大東文化大学七十年史』大東文化学園、1993年、49～51頁。
 - ⁵ 『大東文化大学同窓会報』大東文化大学同窓会、1993年3月1日、6頁。
 - ⁶ 「大同学院」『全国上級学校大観』欧文社、1938年11月、901～903頁。
 - ⁷ 『大東文化大学五十年史』321頁。
 - ⁸ 「終戦当時の状況」『昭和20年8月15日その時私は 元満州通河・方正在住者の手記』通河方正在住者の集い、1982年7月、7頁。
 - ⁹ 「訪中雑感」『第八次日中友好手をつなぐ会訪中団記録 中国日本人公墓参拝の旅』長野県下伊那郡阿智村日中友好手をつなぐ会、1985年、83頁。
 - ¹⁰ 「小説に命を刻んだ 山崎豊子最期の日々」NHK 総合テレビ／クロージアアップ現代、2013年11月19日。